

声に出して読みましょう。

野ばら

おがわみめい
小川未明

大きな国と、それよりはすこし小さな国とが隣り合っていました。当座、その二つの国の間には、なにごとも起らず平和でありました。

ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国から、ただ一人ずつの兵隊が派遣されて、国境を定めた。石碑を守っていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして、小さな国の兵士は青年でありました。

二人は、石碑の建っている右と左に番をしていました。いたってさびしい山でありました。そして、まれにしかその辺を旅する人影は見られなかったのです。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

はじめ、たがいに顔を知り合わない間は、二人は敵か味方かというような感じがして、ろくろくものもいいいませんでしたけれど、いつしか二人は仲よしになってしまいました。ふたりは、ほかに話をする相手もなく退屈であったからであります。そして、春の日は長く、うららかに、頭の上に照り輝いているからでありました。

ちょうど、国境のところには、だれが植えたということもなく、一株の野ばらがしげっていました。その花には、朝早くからみつばちが飛んできて集まっていました。その快い羽音が、まだ二人の眠っているうちから、夢心地に耳に聞こえました。

「どれ、もう起きようか。あんなにみつばちがきている。」と、二人は申し合わせたように起きました。そして外へ出ると、はたして、太陽は木のこずえの上に元気よく輝いていました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

ふたり いわま で しみず うち
二人は、岩間からわき出る清水で口をすすぎ、顔を洗い
かお あら
にま
いますと、顔を合わせました。

「やあ、おはよう。いい天気でございますな。」

「ほんとうにいい天気です。天気がいいと、気持ちがいせ
きも
いします。」

ふたり ばなし
二人は、そこでこんな立ち話をしました。たがいに、頭
あ たたま
を上げて、あたりの景色をながめました。毎日見ている景色
けしき
でも、新しい感じを見る度に心に与えるものです。

せいねん さいしよしやうぎ あゆ かた し
青年は最初将棋の歩み方を知りませんでした。けれど
ろうじん おそ
老人について、それを教わりましてから、このごろはのどか
ひる ふたり まいにちむ あ
な昼ごろには、二人は毎日向かい合って将棋を差していま
した。

はじ ろうじん つよ
初めのうちは、老人のほうはずっと強くて、駒を落と
こま お
してさ
て差していましたが、しまいにはあたりまえに差して、老人
ろうじん
が負かされることになりました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

この青年も、老人も、いたっていい人々でありました。
 二人とも正直で、しんせつでありました。二人はいつしよ
 うけんめいで、将棋盤の上で争っても、心は打ち解けて
 いました。

「やあ、これは俺の負けかいな。こう逃げつづけでは苦しく
 てかなわない。ほんとうの戦争だったら、どんなだかしれ
 ん。」と、老人はいつて、大きな口を開けて笑いました。

青年は、また勝ちみがあるのでうれしそうな顔つきをし
 て、いつしよけんめいに目を輝かしながら、相手の王さ
 まを追っていました。

小鳥はこずえの上で、おもしろそうに唄っていました。白
 いばらの花からは、よい香りを送ってきました。

冬は、やはりその国にもあったのです。寒くなると老人
 は、南の方を恋しがりました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

その方には、せがれや、孫が住んでいました。

「早く、暇をもらって帰りたいものだ。」と、老人はいいま
した。

「あなたがお帰りになれば、知らぬ人がかわりにくるでし
よう。やはりしんせつな、やさしい人ならいいが、敵、味方
というような考えをもった人だと困ります。どうか、もう
しばらくいてください。そのうちには、春がきます。」と、
青年はいいました。

やがて冬が去って、また春となりました。ちようどそのこ
ろ、この二つの国は、なにかの利益問題から、戦争を始め
ました。そうしますと、これまで毎日、仲むつまじく、暮ら
していた二人は、敵、味方の間柄になったのです。それが
いかにも、不思議なことに思われました。

「さあ、おまえさんと私は今日から敵どうしになったの
だ。私はこんなに老いぼれていても少佐だから、私の首
を持ってゆけば、あなたは出世が
できる。だから殺してください。」
と、老人はいいました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

これを聞くと、青年は、あきれた顔をして、

「なにをいわれますか。どうして私とあなたが敵どう
 でしょう。私の敵は、ほかになければなりません。戦争
 はずっと北の方で開かれています。私は、そこへ行って戦
 います。」と、青年はいい残して、去ってしまいました。

国境には、ただ一人老人だけが残されました。青年のい
 なくなつた日から、老人は、茫然として日を送りました。
 の野ばらの花が咲いて、みつばちは、日が上がると、暮れるこ
 ろまで群がっています。いま戦争は、ずっと遠くでしてい
 るので、たとえ耳を澄ましても、空をながめても、鉄砲の
 音も聞こえなければ、黒い煙の影すら見られなかったので
 あります。老人はその日から、青年の身の上を案じていま
 した。日はこうしてたちました。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は戦争に
 ついて、どうなったかとたずねました。すると、旅人は、小
 さな国が負けて、その国の兵士は
 みなごろしになって、戦争は終わ
 ったということ告げました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒

老人は、そんなら青年も死んだのではないかと思いま
 した。そんなことを気にかげながら石碑の礎に腰をかけて、
 うつぶいでいますと、いつか知らず、うとうとと居眠りをし
 ました。あなたから、おおぜいの人のくるけはいがしました。
 見ると、一列の軍隊でありました。そして馬に乗ってそれ
 を指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわ
 めて静粛で声ひとつたてません。やがて老人の前を通る
 ときに、青年は黙礼をして、ばらの花をかいだのでありま
 した。

老人は、なにかものをいおうとすると目がさめました。そ
 れはまったく夢であったのです。それから一月ばかりしま
 すと、野ばらが枯れてしまいました。その年の秋、老人は
 南の方へ暇をもらって帰りました。

読んだ日	時間
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒
/	秒